

introduction

ロンドン中心部の地下会議室に政府要人らが急ぐ。COBRA (Cabinet Office Briefing Room A (内閣事務局ブリーフィング室A)) 危機対応会議が開かれようとしていた。英国本土で化学兵器による攻撃がおこなわれたのだ。どうやら暗殺未遂らしく、スクリパリ父娘はいまも病院で人工呼吸器につながれたままだ。アトロピン (有機リン剤中毒や神経ガス中毒の治療に用いられる) を大量に点滴され、鎮静剤で眠らされて、武装兵に厳重に警備されている。英国は対応を迫られていた。疑いの目の向かう先はロシア政府だった——被害者のひとりはロシア軍情報局の大佐だった人物で、英国側の二重スパイとして活動していたからだ。二〇一八年三月四日、英国の静かな都市ソールズベリーで、スクリパリとその娘がベンチでぐったりしているのが見つかった。ふたりとも瀕死の重体だった。だが、モスクワは関与を否定した。

「われわれの同僚 (英国の政治家) は沈痛な声と深刻な顔をとりつくろい、もしこれがロシアのしたことなら、ロシアが二度と忘れられないような対応をとることになるだろう、と言っている。これ

は虚偽であり、純然たるプロパガンダ、完全なヒステリーの煽動だ」とロシアのセルゲイ・ラヴロフ外相は語っている。^[1]

しかしロシア政府には、報復としての毒殺事件に関与した前歴がある。有名なのはアレクサンデル・リトヴィネンコの事件だ。この人物もロシア軍の元情報将校で、英国に亡命してウラジーミル・プーチン大統領に対する痛烈な批判を展開していた。リトヴィネンコは二〇〇六年一月一日、ロンドンのミレニウム・ホテルでふたりのKGB元工作員と会い、その夜に病に倒れた。数週間後に死亡、死因はポロニウム210による放射線被曝だった。

偶然ながら、ソールズベリー郊外数マイルの場所に、英国国防省の研究所（ポートン・ダウン）があって、この種の毒物の研究をおこなっている。ここの化学兵器の専門家が、六六歳のセルゲイ・スクリパリとその三三歳の娘ユリアの血液サンプルを緊急調査して原因究明に取り組んだ。その結果、検出されたのはノヴィチョクA234——一九七〇年代から八〇年代、ウラジミール・プーチンがまだKGB将校だったころにソ連が開発した神経剤である。皮膚に付いただけで、失明、呼吸困難、激しい嘔吐、痙攣、ひいては死に至るといふ劇毒だ。情報分析の結果、ロシアはスクリパリ父娘の通信を傍受していたことがわかった。モスクワに住む娘が、二週間の休暇で英国の父を訪ねる予定だと知っていたわけだ。娘ユリアの足どりを追跡することで、ロシアのスパイは父親の所在を発見したのだから。^[2]

「これはロシア国家によるわが国への直接的な攻撃か、あるいは重大な被害を及ぼす恐れがあるにもかかわらず、この神経剤の管理を怠って外部への流出を許したか、そのいずれかでありませう」英

国首相テリーザ・メイは下院議会で述べた。四八時間以内の説明をロシア政府に求めるとし、「誠意ある回答が得られない場合は、ロシア政府による英国への不法な武力の行使に当たると結論します。その場合、対抗手段としてどのような措置をとるか、またこの議会にてその詳細を発表いたします」^[3]

ロシアの政府系報道機関は陰謀論を流し、スクリパリ父娘を本人の意志に反して拘束していると、英国当局を非難した。また、問題の神経剤が軍隊級のものだとすれば、なぜ被害者は亡くならなかったのかとも述べている。この主張には二重の効果があり、疑惑と恐怖を同時に広めることになった。つまり、クレムリンが本気でやれば失敗するはずがないと言いたいわけだ。英国はロシアの外交官二三名を、スパイの疑いがあるとして追放した。同盟諸国は英国と足並みをそろえ、自国駐在のロシア「外交官」を同じく追い払った。アメリカは六〇名を国外退去させ、また金融機関や輸出品に制裁措置を発動している。ロシアは、報復として各国の外交官を追放処分にした。^[4]

〈ベリングキャット〉では、成り行きを注視しつつ参戦の機会を待っていた。ぼくたちは世界じゅうに散らばるネット集団であり、戦争犯罪を調査したり、偽情報をあばいたりしているが、その手がかりになっているのはインターネットで公開されている情報——つまりソーシャルメディアの投稿、流出データベース、無料の衛星画像などだ。いまは虚偽情報がネットにあふれる時代ではあるが、逆説的なことに、事実を掘り出すのは以前よりずっと簡単になっている。〈ベリングキャット〉では、スタッフ一八人からなる中核チームが、数十人のボランティアの協力を得てレポートを書いているのだが、それを何十万という人々が閲覧してくれるし、そのなかには官僚、メディア界

の重大物、政策立案者といった顔ぶれもまじっている。ぼくたちに課題はないが、信条はある。「証拠があり嘘があれば、やはり人はその違いを気にする」というのがそれだ。

事件から数か月、セルゲイ・スクリパリと娘ユリアは一命をとりとめたものの、ロンドン警視庁の捜査は難航していた。毒物に曝露された場所はセルゲイ・スクリパリの自宅玄関先と思われたが、そこは監視カメラの範囲に入っていなかったのだ。捜査官らが集まって地元の監視カメラの映像一万一〇〇〇時間ぶんを視聴し、クレジットカードの支払い記録をほじくり返し、地域の携帯電話の使用記録を調査していたが、そんな捜査の最中に次の毒殺事件が発生した。ソールズベリー地域に住むある男性が、依存症のせいでごみあさりをする破目になり、ニナ・リッチの香水（ブルミージュール）の壊らしきものを見つけた。女友だちにプレゼントしたところ、それを手首にスプレーした彼女は重体に陥ってしまったのだ。七月八日には、ついに生命維持装置をはずされている。〈化学兵器禁止機関〉がこの偽香水塚のサンプルを分析し、ノヴィチヨクが含まれていることを確認した。「この神経剤は世界でもまれな化学戦争用の毒物のひとつであり、これほど狭い地域内で二度も発見されるのは偶然ではありえない」と英国テロ対策警察は語っている。この香水塚は犯人が捨てたものと思われるが、なかには何千何万という人命を奪える量の神経剤が入っていた。

事件から半年後、ぼくたちにも使えそうなどっかかりを、やっとな警察が提供してくれた。毒殺未遂事件の二日前、ふたりのロシア人男性がガトウィック空港（ロンドンの南にある国際空港）に到着する様子を取めた映像だ。空港に到着後、男性らはすぐに鉄道でロンドンからソールズベリーに移動し、問題の亡命ロシア人の周辺をうろついていた。この容疑者の身元確認のために当局は協力を求めて

いて、それで画像を公開したわけだ。ふたりは「アレクサンドル・ペトロフ」と「ルスラン・ボシロフ」の名で旅行していたという。ロンドン警視庁としては、だれかが身元を特定してくれればと期待していたわけだが、たしかに特定してくれた——クレムリンが。

「このふたりなら身元は判明している。特定できた」プーチンは言った。「みずから名乗り出て、すべて包み隠さず話してくれると期待している。それがだれにとつても一番だろう。べつに特別なところなどないし、犯罪とは無関係なのはまちがいないと思う。近いうちに明らかになるだろう」²

その「近いうち」は、大統領が要求したらあつという間にやって来た。翌日の二〇一八年九月三日、ふたりの容疑者が降って湧いたように出現し、クレムリンの国際ニュース・チャンネル（RT）でインタビュに答えていたのだ。（ベリングキャット）内部のチャット・フォーラムで盛んにやりとりしながら、ぼくたちはこの放送にかぶりつきになっていた。ふたりのロシア人は無実を主張し、自分たちはただの友人どうしで、休暇が終わる前に英国を訪れ、有名な大聖堂を見に行っただけだと言った。「ペトロフ」は目つきが険しく、人前に引っぱり出されて憤慨しているようだった。「ボシロフ」はおたおたしていて、顔にうっすら汗をかいている。自分たちは暗殺者などではない、フィットネス業界の事業家である、というのがふたりの言いぶんだった。

インタビュアー「あちらでなにをなさってたんですか」

ペトロフ「すごくいい街だから行って見たらって、だいたい前から友人たちに勧められてたんで

す」

インタビュアー「ソールズベリーがですか？　すごくいい街だと？」

ベトロフ「ええ」

インタビュアー「どこがそんなにいいんですか」

ボシロフ「観光都市なんですよ。有名な大聖堂があるんです、ソールズベリー大聖堂っていう。ヨーロップバジュー、というか、世界じゅうで有名だと思います。高さ一二三メートルの尖塔が有名なんです。時計も有名です。いまでも動いてる世界最古の時計で」

このがっちりしたロシア人たちは、毒殺未遂事件の前日にも鉄道でソールズベリーを訪れている。ロンドンから往復三時間だが、このときは三〇分しか滞在しなかった。雪のため観光どころではなかったからだという。そして翌日、ふたたびロンドンからソールズベリーを訪れる。だが、ふたりはスクリパリの家がどこにあるかまったく知らないと主張した。インタビュアーは香水壠について質問した。

ボシロフ「ちょっとばかげてると思いませんか。男どうしてゲイでもないのに、女ものの香水なんか持ち歩きますかね。税関を通るとき、荷物はみんな調べられるんですよ。おかしなものを持ってれば、ぜったい質問されるでしょう。男のくせに、なぜ女ものの香水をバッグに入れてるんだって……」

インタビュアー「おふたりはGRU（軍の情報部）のかたですか」

ペトロフ（インタビュアーに）「あなたはどうなんですか」

インタビュアー「私ですか。違います。あなたは？」

ペトロフ「違います」

ボシロフ「私も違います」^[10]

内々のメッセージボードでは、ぼくたちの意見は一致していた。このふたりは嘘をついている。「高さ二三メートルの尖塔が有名なんです」？ そんな話しかたをするやつがどこにいる、（ウィキペディア）でも読みあげてるのか。英国当局が正体を突き止められないなら、ぼくたちがやったりやろうじゃないか。とはいえ手がかりはほとんどない。あるのはふたりの顔写真、そして本名だと主張されている氏名だけだ。

数日後、ぼくたちは事件を解決していた。

この大手柄は世界じゅうでビッグニュースになり、それと同時に数々の疑問の声も巻き起こった。我流のインターネット探偵の集団が、どうしてロシアの「暗殺班」の身元を特定できたというのか。その話はそもそも信用できるのか。その連中はどこの人間なのか。だいたい（ベリングキャット）とはなんなのか？

というわけで、話は一〇年前にさかのぼる。当時はスマートフォンが世界じゅうに普及しはじめたところで、個人的な親交を深め、意見や映像を発表する場^{プラットフォーム}としてソーシャルメディアが台頭しつつあった。人類はそれと意図せず、すさまじく赤裸々な自己像をだれにでも見られる形で公表

するようになったのだ。こんなことは歴史上、世界のどこを見てもかつてなかったことだ。人々は、自分の個人情報がどれだけ公開されているか気づいていなかった——罪のない人々も、罪のある連中もそれは同じだ。

当時のぼくは三〇代前半、よくいるパソコンが趣味の会社員だった。仕事が面白くなって、関心があるのはニュースだった。そんなある日、とつぜんひらめいた。ネットで検索すれば、マスコミも専門家もまだ知らない事実を発見できるのではなからうか。同じことを思いつく人間はほかにもいて、ネットのコミュニティが自然に形成されていった。(ユーチューブ)や(フェイスブック)、(ツイッター)などなどに手がかりが残っている、そんな事件や事故に引き寄せられて集まってきたわけだ。経験を積むにつれ、手法は洗練されていった。最新の調査手法を教えあい、ああでもないこうでもないと言ってうちに、しだいに形が整ってきてひとつの新しい分野が生まれ、ジャーナリズムと人権活動と犯罪捜査が結びつくことになったのだ。

ぼくたちはこれまで、シリアの独裁者バッシュアール・アル・アサドが自国民に化学兵器を使用したという証拠を発見した。(マレーシア航空17便)撃墜の黒幕をあばいた。ヨーロッパに潜む(ISIS)シンパの居所を突き止めた。ヴァージニア州シャーロットツヴィルじゅうを荒らしまわっていた、ネオナチ集団の身元を明らかにした。新型コロナナウイルスとともに広がった、偽情報の洪水を食い止めるのに手を貸した。そして、クレムリンの「暗殺班」の正体も暴露したというわけだ。

これはまったく新しい分野だから、決まった名称がまだない。いちばん一般的なのは「OSINT」^ト open-source intelligence (オープンソース諜報活動)の略だ。ただ、この略語は政府の諜報

活動に由来するものであり、とうぜん秘密主義的な活動だから、公開と共有を重視する（ベリリングキヤット）のやりかたとはそぐわない。「オンライン・オープンソース調査」のほうがもっと近い、もっと正確な表現だ。とはいえ、ぼくたちのやっていることはたんなるインタナーネットの調査ではなく、もっとさまざまなことをやっている。偽情報で社会を歪めようとする勢力と闘い、あくまで証拠にこだわり、そしてふつうの市民がどうやって悪事を暴露し、権力者に説明責任を果たさせるにはどうしたらいいか、身をもって実例を示している。

民間の調査員マイケル・バゼル——オープンソース調査法の導師だ——は、かつてはFBIで犯罪者を追うためにデータベースをあさっていたが、当時それにはたいへん経費がかかったため、しろうとは手が出せなかった。「しかし今日のOSINTなら、ある人物について知りたいことがあれば、おそらく九八パーセント以上の情報は無料で手に入るでしょう。わたしがOSINTの側に本気で飛び込んだのはそのためです」と彼は言っている。「これならだれにでもできると、はたと気がついたので」と。^[11]

マイケル・フリン将軍は、アメリカ国防情報局の局長だったとき（トランプ政権に入って体面を失う前の話）、かつて貴重な情報の九〇パーセントは秘密の情報源から得ていたが、ソーシャルメディアの登場以後はそれが逆になったと言っている。価値ある情報の九〇パーセントは、だれでも見られるオープンソースから得られるようになったというのだ。^[12]

諜報機関は、以前からオープンソースの情報を収集していた。新聞をなめるように読んだり、ラジオ放送を聴いたり。しかし、そういう情報は軽視されがちで、秘密の情報源が好まれた。そのほ

うが莫大な予算と影響力を確保できるからだ。ほくたち一般市民から見れば、そんな秘密情報には問題がある。検証しようもないから、それを押さえている人々を信用する以外にしかたがない。しかしイラク戦争以来、その信頼はぐらつきはじめた。アメリカ率いる多国籍軍は、サダム・フセインの大量破壊兵器を理由として侵攻を正当化していたのに、それが結局発見されなかったからだ。

今日の社会にはびこる不信感、大衆が指導層を疑っているというだけでなく、もっと広範な問題になってきている。市民どうしが互いに根深い猜疑心を抱き、政治的な党派はそれぞれの小宇宙に引きこもり、外部の情報に耳をふさぐ。人はだれしも、自分はちがう、偽情報や陰謀論にだまされるような人種ではない、と思いたがるものだ（こんな本を手にとる読者は、きつと情報操作に反対している人だろうし）。しかし、人が信じていることの多くは、たんに以前だれかから聞いたことでしかない。だから専門家が不可欠になるわけだ。しかし、もうそれだけではじゅうぶんではない。あることを事実と信じるかどうかが、集団への忠誠心の問題になってしまったら大変なことになる。今日では、なにかを主張するなら、だれにでも調べられる形で論を展開しなくてはならない。だから（ベリリングキャット）の方針はこうだ——リンクをクリックして、ほくたちの結論が正しいか自分で検証してみてね。

もう何年も前のことだが、インターネットがそのまま発展していけば、まもなくサイバー世界のユートピアが実現すると大宣伝されていたものだ。しかし最近では、世論は完全に反対方向に振れていて、デジタル時代は建物解体用の鉄球も同然と見なされるようになっていく。つまり、ジャーナリズムも礼儀も政治も、すべて粉砕していくというのだ。

〈ベリングキャット〉としては、こういうサイバー悲観論を受け入れるつもりはない。インターネットという驚異には、人類によい影響を与える力がいまもあると思う。ただ、社会を守り、真実を擁護するのは、もう体制側の専売特許ではない。ほくたちみんなにその責任がある。

つまり、「極秘」情報の取り扱い許可とか、秘密会員のみ閲覧可能な情報とか、そういう話ではないということだ。〈ベリングキャット〉はこれまになかったもの——ふつうの人のための情報機関なのだ。

ラップトップ上の革命

ネット調査の可能性に気づく

1

二〇一一年二月二日、午後の礼拝のあと、数台のバスがタハリール広場に停まった。このカイロ中心部の円形交差点は、数日前から抗議の市民で埋まっていた。ホスニ・ムバラク大統領——エジプトを三〇年も支配してきた独裁者——の辞任を要求する人々だ。停まったバスから降りてきた男たちは、手に手に、鉞マチエーテや棍棒や西洋かみそりを持つていた。かれらは抗議の市民に加わるためではなく、その市民たちを襲撃しにやって来たのだ。

最初のうち、男たちは市民を取り囲んで脅しつけようとした。やがて、べつの場所から馬に乗った男たちも現れた。ラクダに乗った者も数名いて、剣を振りかざして群衆に突撃をかけてくる。勇敢なデモ隊は防衛境界線を張ろうとしたが、攻撃は上空からもやって来た。逃げる市民たちに向かって、体制支持側が屋上からレンガや熱湯を浴びせはじめたのだ。催涙ガスの雲が湧き、市民たちは濡れた布きれを口に当てる。ジャーナリストも標的にされていたが、軍はただ見ているだけだ。市民たちは道路を掘り返し、石を拾って防戦に努めた。ある戦車指揮官は、罪もない市民が襲われているのに、なにもするな、保護するなど命令されて困惑し、銃を自分の口にくわえて、傍観するぐらいなら自殺すると迫った。ほかの兵士たちは、あっさり持ち場を離れて脱走した。夜が来るころには戦闘はいっそう激化していたが、多くのレポーターは記事を送信するためにすでに立ち去っ

ていた。戦線は押したり引いたりだったから、外をうろろしていれば負傷する恐れがあったのだ。

ただ、ヘナシヨナル・パブリック・ラジオ（「アメリカの非営利ラジオ局、通称NPR」の記者アンディ・カーヴィンは一日じゅうその場ががんばって、刻々と入る「ラクダの戦い」の現況報告を接ぎあわせてレポートを続けていた。彼には掩蔽は必要なかったし、催涙ガス対策として酢にひたした布で口をふさぐ必要もなかった。ワシントンDCでパソコンの前に座ったまま、ソーシャルメディアを通じてアラブの春を記録していたのだ。彼はのちにこう書いている。「ツイートが入ってくるたびに、現場の状況がよりよく視覚化できた。タハリール広場からツイートしている人々は、それぞれほかでは得られない視点から事態を見ていた——が、それはどうしても直接の視界に限られている。ほかの場所では、わたしはヘリコプターに乗って、タハリール広場の上空を飛びつつ戦場を見おろしていた。頭のなかでそれがひとつに組み上がっていく——その状況認識は、地上にいたらたぶん得ることはできなかったらう」^[1]

何か月ものあいだ、カーヴィンは週に七日、多いときは一日に一八時間もツイートしつづけ、チュニア、エジプト、バレーン、リビア、イエメン、シリアの蜂起を詳細に報じた。一日に一〇〇回以上ツイートすることもしばしばで、スパム送信と勘違いされて一度はツイッターのアカウントを凍結されたほどだった。^[2] 外国の通信記者は、危険な現場に駆けつけるのを誇りにしているから、こういう仕事のしかたは真の報道ではないと見なされがちだ。しかし、財政難に苦しむマスコミ業界にとっては、調査をソーシャルメディアに外注できるのはありがたい話だった。問題は、ツ

イートする人々の多くが活動家で、それぞれに意図や目的があるということだ。ツイートを遠くから読むジャーナリストたち——地元の言語がわからず、まして文化的背景などわかるはずもない——に、それをどうしたら正しく解読できるというのか。

アラブの春が提起したのは、デジタル時代の報道ではきわめて深刻になってくる問題——すなわち検証だった。この情報が真実かどうかどうしたらわかるのか。いまなにを見ているのか、どうしたらわかるというのだろうか。

ほくもそれと同じ疑問を抱いていた。当時のほくは、レスター（イングランド中部の州レスターシアの州都）で管理仕事をしながら、あき時間にはデスクで動画を見て過ごしていた。つまり、タハリール広場を見おろすホテルの窓からのライブ配信動画を見ていたのだ。警察が抗議する市民を押し戻し、と思ったらその警察自身が追い払われ、奇妙な戦場が現出していた。群衆が引きあげては戻って行く。催涙ガスで視界が曇り、空中を石つぶてが飛び交い、高圧放水砲が噴出する。

ずっと以前、ほくはジャーナリストになりたいと思っていた。ひょっとしたら、こういう事件を現場で取材するみたいだ。しかし大学はうまく行かなくて中退し、さまざまな事務職を転々としたが、興味の持てる仕事はなかった。政治家や有名人やジャーナリストを、べつの生物種を見るような思いで遠くから眺めていたものだ。広い世界のどこにも居場所がなく、世界に影響を与える見込みなど皆無だった。それでオンライン・ゲームに逃げ込んだ。取り憑かれたように熱心にプレイし、さまざまな国にまたがる大きなプレイヤーの集団を組織運営するまでになった。だが、そこへ九・一一が起こって、ほくの関心はゲームを離れた。ニュースはどんどん入ってくるのに、新聞の報道

はまったく追いつかない。物足りない、もっと知りたいと思っていたら、ネット・フォーラムの〈サムシング・オーフル〉に行き着いた。ここには、思いつくかぎりのテーマについて議論や鋭い考察が満ち満ちていた。こうしてはくは、今度は時事ネタというやつに取り憑かれることになったのだ。二〇一一年には、一日で最も刺激的な時間は朝一番になっていて、始業時間よりずっと早く出勤していた。だれもないオフィスでパソコンに向かい、インターネットでアラブの春の最新情報をあさっていたものだ。

なかでも最高の情報源は「中東ライブ」^{ミドルイースト}だった。『ガーディアン』紙のウェブサイトでやってきた、最新ニュースを扱うブログだ。とくに夢中で読んだのがリビア内戦についてのスレッドだ。この内戦のきっかけは、リビアを長らく支配していた独裁者ムアンマル・カダフィが、東部の都市ベンガジで抗議活動を武力で弾圧したことであり、その結果が武力蜂起だった。正式な軍事訓練を受けたこともない男たちが、それでも〈AK47〉を手に持ち、ふつうのトラックに飛び乗って前線に突っ込んでいったのだ。カダフィはこう警告した。「私は大軍を率いて進軍し、リビアを寸土もあまさず浄化する。家という家、部屋という部屋、通りという通り、賊という賊を浄化し、この国を完全に消毒する」。二〇一一年三月、国連の安全保障理事会は市民を保護するために攻撃を承認し、NATOは政府軍に対し空爆を開始した。³戦況は反体制側有利に転じた。かれらはミスラタ、ベンガジ、ナフサ山地の拠点から進軍し、首都トリポリ、そしてカダフィの出身地スルトを制圧していく。

はくは見つけられるかぎりの英語の記事をむさぼるように読み、〈サムシング・オーフル〉の掲

示板をスクロールし、カーヴェインたちのツイートを探した。リビア全土でインターネットは遮断されたため、漏れてくる情報は限られていた。数少ない声高なツイッターのアカウントは、さまざま主張をしていた——が、たいていは反体制側かカタフィ支持派かの強烈なバイアスがかかっている。そういう主張の裏付けが欲しくて、ぼくは紛争地域を旅している外国特派員のツイートも読むようになった。それで気づいたのだが、こういう特派員たちは、発表される記事には収めきれないほど情報を集めている。ツイッターはそういう情報を吐き出すメモ帳になっていて、ほかでは読んだことのない事実がそこには書かれていた。

二〇一一年八月なかば、ジャーナリストのグループがたまたま、タワルガという町のそばを車で通りかかった。反体制派の拠点ミスラタからさほど遠くない町だ。見れば、建物が燃えていた。しかし、政府軍の押さえている重要な都市スルトでもっと大きな事件が起こっていた。そこでは戦闘が続いていたのだ。もつとあとになって初めて、世界はタワルガでなにが起こっていたのか知ることになる。この町は親カタフィ派の拠点だったため、ここを制圧した反体制派は報復を開始し、一万の住民に退去を命じた。その後、反体制派はタワルガに火をかけて荒らし、ゴーストタウンに変えてしまった。⁴このツイート——住宅が燃えているのを、車の窓からちらと見たという——が、民族浄化の最初の徴候だったわけだ。

ニュース記事に収まらなかった、細かいながら興味深い情報を見つけたたびに、ぼくは〈サムシング・オーフル〉や『ガーディアン』のライブブログのコメント欄に投稿した。負けたくないという気が起こってきて、まだだれも気づいていない事項をいち早く投稿しようとかんばりだした。毎

朝出勤するたびに、前夜出てきたリビアに関する情報をあさり、リンクをまとめたものだ。数か月もするころには、さらに網を広げて、人権保護団体のレポートとか、〈ユーチューブ〉の動画とか、〈フェイスブック〉の文章とか、〈タンブラー〉〔ブログサービスの一種。テキストや画像だけでなく動画や音声も投稿できる〕の写真とかまであさるようになっていた。そんなこんなで何千回と投稿していたから、だんだん自分の狭いニッチが確立されてきた。それはささいな事実というやつだ。報道記者は事件の全容を伝えようとするものだが、そんなことはハナから考えなかった。ぼくがやっていたのは、ほかの人の役に立ちそうな豆情報を掘り起こすことだった。

このささやかな目標は、わかってみれば思っていた以上に重要だった。当時は代替メディアという生態系が拡大しつつあるところで、いかがわしいウェブサイトが山ほど生まれ、政治的な議論に勝つために動画や画像の恣意的な引用をやっていた。対照的に、ぼくはアラブの春に対してなんの思惑もなかったし、どちらの派閥に肩入れもしていなかった。ただ興味があって、もっと知りたいと情報の切れ端をあさっていただけだ。たくさん情報がまわっていたが、その多くは誤っていた。ぼくは正しい情報だけに焦点を絞るようになっていった。だから、かならず情報源を明示し、それがどこから来た情報なのかわかるようにしたし、自分の知識が乏しいこともいつも認めていた。この手法の発展形が、のちの〈ベリリングキャット〉の指針——情報の混沌には透明性で対処することだ。

二〇一一年八月一二日金曜日の早朝、ぼくは会社のパソコンが立ちあがるのをもどかしい思いで待ちながら、アラブの春がどうなったかとそわそわしていた。イエメンでは何十万という人々がデ

モをしていた。アリー・アブドゥラー・サーレハ大統領は暗殺未遂事件で負傷して回復期にあったが、人々はその辞任を要求していたのだ。シリアでは、治安部隊が複数の都市で民主化要求デモに対して発砲を開始していた——バッシュヤール・アル・アサド大統領は権力の座を明け渡すのを拒否している。そしてリビアでは、ブレガなどの重要な都市をめぐる戦闘が激化していた。ブレガは人口数千人のアフリカ北岸の町で、地中海の最南端に当たる。

ぱっとしない辺境の町だが、ブレガが戦場になったのは、石油精製所と空港と戦略的に重要な港があったからだ。六か月の戦闘のすえにカダフィ軍に占領されたが、いまは反政府軍によつて攻撃されており、内戦のターニングポイントになりそうな気配だった。町の東部で戦闘が勃発し、両軍互いに砲弾を浴びせあっていた。そしてその前夜、反政府軍がブレガの一部を制圧したと主張しはじめたのだ。ところが一夜明けて八月一二日、リビア政府はブレガはこちらが掌握していると言っていた。

いっぽう、反政府側は（ユーチューブ）に動画をアップしていた。それはこのころ生まれた新ジャンルのひとつ、兵士の自撮り動画というやつだった。つまり戦闘員がカメラに向かって勝利を自慢しているのだ。手ぶれのひどい画面のなか、坊主頭でひげづらの銃手が、本人の言う「征服したばかりのブレガ」の町をふんぞりかえて歩きまわっている。建物は破壊されていて、通りに人影はない。ただ、砂漠用の迷彩服を着た反政府軍の仲間がちらほら見えるだけ。これは勝利の証拠かもしれない。しかしやはり、反政府軍が嘘をついているという可能性もある。

ふつうのジャーナリストは、特ダネをライバルから守ろうとする。それに対して、面白そうなネ

タはなんでも投稿し、みんなでいっしょに解釈し、見識をプールしようとするのがネットの姿勢だった。こういう助け合いの精神が最初からネット調査の特徴だったし、この精神はいまの（ベリングキヤット）にもそのまま受け継がれている。しかし、これが事実だとネットで主張すると、激しい論争が始まるものだ。どちらかの勢力を支持する匿名の投稿者たちが、自分の望む筋書きに反するような発見には噛みついてくるからである。そんなわけで、『ガーディアン』のライブブログのコメント欄に投稿して、ブレガを制圧したと称する反政府軍の動画へのリンクを張ったときは、ほかの投稿者に手厳しくやつつけられた。これがなんの証拠になるんだ、ここがブレガだどうしてわかる、どこでだって撮れるじゃないか、というのだ。

一理ある。一度も行ったことがないほくに、これがブレガかどうかどうしてわかるだろう。また動画を見なおし、手がかりになりそうなものを探した。アラビア語が読めないから、店の看板みたいなものは役に立たない。画面はあらかた、しゃべる兵士の顔で占領されている。背景に見えるのは、平屋建てで白い壁のコンクリートの建物と街灯柱で、カメラがぶれぶれだからそれがあつちこつちに飛びまくっていた。

ぼくは一時停止をクリックし、ノートパソコンを手にとり、無人のオフィスをうろろろして考えをまとめようとした。プリンターのところでちょっと立ち止まり、紙を一枚とってきて、デスクに戻ってペンを手にし、一時停止していた（ユーチューブ）動画をまた再生した。さっきの兵士がはいかわらずしゃべっていたが、大股で歩いているのは二車線の通りで、こつちを向いたりあつちを向いたりしている。ぼくは何度も一時停止して、兵士のまわりの通りをスケッチし、ささやかな道